

まえがき

一国の宰相——なんという重い言葉か。

その意味を危機に当たつて国家の命運を切り拓く指導者ととらえるなら、明治時代の指導者の群像が浮かんでくる。

先進工業国に遅れて開国した日本を、アジアで初めての近代国家に仕上げた先人たちは、日本を日本本来のよき形にとどめながら西洋近代化を成し遂げるといふ偉業を達成した。当時の日本について西洋諸国はこう書いた。

「日本が自己の古き伝統の価値を減ずることなく西洋の科学と技術を同化し西洋の標準を採用したる速度と完全性は偏く賞嘆せられたり」

右の記述は、満州事変について調査するために日本と支那に派遣された「日支紛争に関する国際連盟調査委員会」、通称リットン調査団が事変に至るまでの日支両国の歴史を踏まえてまとめた満州事変報告書の「緒論」に書かれた日本評である。

一九三二（昭和七）年九月に発表された同報告書は満州国の独立を認めなかった。そのために日本は国際連盟を脱退してしまつたのだが、日本が大いに反発したリットン報告書でさえ、明治以降の日本の改革を絶賛していた。重要なことは、開国、改革が日本自身の真髓を變えることも、損ずることもなく行われた点だ。

明治帝国憲法の中心的起草者、伊藤博文をはじめ、五箇条のご誓文を起草した木戸孝允、教育勅語を發布した山縣有朋をはじめとする多くの人々がその偉業を成し遂げた。彼らは、日本が列強に伍していかなければならないとき、すべての力を發揮する前提に、日本人が全き善き日本人であることと同時に、世界を広く俯瞰（ふかん）することの重要性を認識していた。皆が皆、総理大臣になつたわけではないが、紛れもなく、あの時代の指導者には宰相の資質が備わっていた。

だが、大正から昭和にかけて、日本は致命的な過ちを犯していく。その原因は、一にも二にも世界情勢を読み取る能力に欠けていたことだ。一九〇五（明治三八）年、日露戦争に勝利した日本に米国がどれほどの根深い警戒心を、清朝中国がどれほどの強い憎悪を抱き始めたか、日本は十分気づかないまま、その後の歴史を辿つた。

結果、一九二一年のワシントン海軍軍縮会議で日英同盟を切られ孤立に追いやられた。日本に対する諸国の不条理な外交の壁を打ち破れず、三一年に満州事変を起こし、四一年には

真珠湾攻撃に踏み切った。四五年、ソ連を信じて停戦の仲介を頼むが、逆に中立条約を破棄され、突然攻め込まれた。敗戦以降のわが国の政治については、本書でも触れたが、それは主として日本の真髓を削り取る施策の連続だった。

例外が岸信介である。彼一人、国家のあるべき姿を心に刻み、まともな国家としての形を失った祖国をまともな国家に近づけようと、命をかける覚悟で取り組んだ。明治時代の一群の指導者以降、宰相という重い呼称に値するのは岸一人であろう。

目を海外に向ければ、宰相としてまず思い浮かぶのは英国のウインストン・チャーチルである。

元米国大統領のリチャード・ニクソンは『指導者とは』（徳岡孝夫訳、文藝春秋）で、氏の会った「真の意味で強い指導者は、すべて、きわめて英明、自己を律するにきびしく、勤勉で、満々たる自信を持ち、夢に駆り立てられ、他人を駆り立てることができた」と書いている。また、「歴史を学ぶのを怠った者は、歴史を繰り返す」として、「一時代の指導者が先行者よりも遠く未来を見通せるのは、彼らが先人の肩の上に立つからだ」と、歴史を学ぶことの重要性に触れている。

そのニクソンが偉大なる指導者の筆頭に挙げたのもチャーチルだった。チャーチルは保守党から自由党へ移り、再び保守党に戻るなど、妥協に甘んじない人物だった。自己の信念に

忠実であるが故に、党主流と対立して閣外に出されもした。ヒトラーの台頭著しいナチス・ドイツに対してチェンバレン首相以下、英国全体が話し合いと宥和策（ゆうわ）で対処しようとしたのに対し、チャーチルは、ヒトラーの軍拡と行動を見ればナチス・ドイツには力をもって対立するしかないと説き、「いまこそ、わが国の目覚める最後のとき」だと訴えた。英国よ、立ち上がれと、孤軍奮闘、議会で大演説をした。

英国議会もメディアも、これをチャーチルの大言壮語と冷笑したが、事態はチャーチルの言う通りになった。一九四〇年三月一〇日、すでにチェコ、ポーランド、デンマーク、ノルウェーに侵攻していたヒトラーはベルギーとオランダに侵攻した。

その日、チェンバレン内閣が倒れ、チャーチルは首相に就任した。国難のなかで国家の最高指導者となり、重い責任を引き受けることについて、チャーチルはその日の日記に「夜半の三時頃床につくと、私はほっと安堵のため息をついた」と書いた。さらに、「ついに私は、全権を行使する地位に立つことができたのだ。私は、運命と道連れになったような気がした。同時に、これまでの私の生涯は、一切、いまこの時、この試練のための準備期間に過ぎなかったような気がした」と書いている（『チャーチル』ロバート・ペイン、法政大学出版局）。

困難に直面して、彼は自分がその困難に当たる最前線に立つことに「ほっと安堵」したのである。失意の時も孤独の時も含めて、それまでのすべてがこの国難に打ち勝つ責任を負う

ためにあつたと、彼は信じたのだ。

チャーチルはドイツに勝利することだけを考え、米国をも戦いに引き入れた。そして、英国を勝利に導いた。だが、皮肉にも、保守党は勝利を眼前にして選挙で大敗し、彼は下野せざるを得なかった。それでも六年後の一九五一年、保守党は再び勝利し、チャーチルは首相に返り咲いたのである。

このように彼の政治人生は劇的である。その一生を見ると勝利と敗北が糾あひざなえる縄の如く、交互に出現している。しかし、チャーチルは確かに英国を救い、不朽の名を残した。それは彼がどんな場面でも、祖国英国に熱烈な愛を抱き、敗北を恐れずすべてを懸けることを躊躇ちゆうちゆうしなかつたからである。

チャーチルを偲おもびつつニクソンは書いている。

「政治の世界で成功したいなら、失策よりも無為のほうがはるかに悪いことを、若い政治家は知らなければならぬ」

これこそ日本の政治家たちに知ってほしいことだと痛感する。

*

当のニクソンも宰相と呼ぶに相応しい。

ニクソンは米国の中国政策を対立及び包囲の政策から、関与して開かせる政策へと大転換

させた。田久保忠衛氏の『ニクソンと対中国外交』（筑摩書房）では、彼は一九六八年一月の選挙で大統領に選出されたその前年、欧州とソ連、アジア、中南米、アフリカと中東へと、四つの旅をしている。その年の一〇月号の外交専門雑誌『フォーリン・アフェアーズ』に、ニクソンは「ベトナム後のアジア」という題で米国外交の展望について書いた。一九六〇年の大統領選挙でジョン・F・ケネディに敗れ、失意のなかでニクソンは世界を旅し、指導者と会い、終わらせなければならぬベトナム戦争後の世界秩序の構築について考えを深めていたのだ。チャーチルと同じく、権力からも地位からも離れたときに、ニクソンは次の飛躍のために思索し、指導者に必要な力量を秘かに磨いた。

ニクソンのベトナム後のアジア政策の主軸は、「中国を永久に諸国家から成る家族の外に放置し」ておくわけには絶対にかないとの主張である。「世界は、中国が変わるまで安全ではありえない。したがって、われわれの目的は、われわれが事態の成り行きに影響を及ぼし得る限りにおいて、変化を誘発するでなければならぬ」という主張は、後の、七一年七月一日の、いわゆるニクソン・シヨックと呼ばれる訪中計画発表につながった（前掲書）。

ニクソンは米ソが対立する冷戦構造において、中ソ間にくさびを打ち込み、中ソ対米国の力関係を、米中対ソ連に反転させた。関与政策で中国を米国側に抱き込むことでソ連封じ込めに成功したのである。

それより七年前の一九六四年一月、日本訪問の際に大磯の吉田茂邸をニクソンが訪ねた際の会話が『指導者とは』に出てくる。吉田は同年一月にフランスのドゴールが日本に相談もなく中国と国交を回復したことを憂いて、「アメリカも同じことをする可能性があるか」と問うたそうだ。

当時の米国の政権は民主党のジョンソン政権であり、ニクソンは「他の政権であるから」なにも言えない」と答えた。すると、駐米大使だった朝海浩一郎が、米国は幾度も日本の頭越しの決定をやった、対中関係でも同様かと尋ねたために、自分は「そういう可能性は必ずしも排除しないと答えた」と、ニクソンは書いている。

まさに七年後、吉田や朝海が懸念した「日本の頭越し」外交で、米国は中国と手を結んだ。虚を衝かれたと感じた日本側はこれをニクソン・シヨックと呼んだが、ニクソンは日本の対中接近はすでにその二〇年も前から吉田によって構想されていたと、突き放している。

吉田は儒教思想を通じて中国人に深い親近感を抱いており、中国との貿易が結局は平和に結びつくと信じていたという。ニクソンによれば、吉田は、「中国が朝鮮戦争に介入したのは国境地帯の中国領が脅かされたからにすぎず、中国人は侵略者とは戦うが侵略はしない本質的には平和な民族だと信じていた」。だからこそ、日米両政府が講和条約を討議していた一九五一年、吉田は中華人民共和国との国交回復の希望を漏らしたとも、指摘されている。

頭越し外交、置き去り外交との意味を込めてニクソン・ショックだと論難する日本の感傷的反応に、ニクソンは全く動じない。彼は、米国大統領として大きな世界戦略のなかで自国の利益を守り通す、そのために外交の大転回を決意し、実行する。それは一人で下す決断であり、一人で負う責任だ。覚悟と自負を持つ指導者にとって、最も鮮烈な生せいの意義を感じる局面であろう。

ニクソンは、チャーチルを「時代の危機を処理する能力と性格と勇気を持つのは自分一人と信じた」指導者だったと書いた。そして、「その信念は正しかった」とも評した。ニクソンもまた、冷戦において自由主義国が社会主義国に勝利するには対中接近が正しい答えであり、自分にもみ、それを実現する能力と性格と勇気があると信じていたのだ。

ニクソンはチャーチルに関して、「政治の世界での敗北は、本人が打ちのめされ政治をやめるまでは致命傷になり得ない」、「政治では再び起つために倒れる」と書いている。チャーチルと同じように、起伏の激しい人生を送ったニクソンにとって、それは彼自身の思いであったに違いない。

政治家の評価は棺を履ってはじめて歴史によって定まることも、ニクソンは十分に承知していたであろう。だからこそ、その時々々の世論ではなく、己れ一人の決断を信じた。必ず思索の時間を取り分け、考えを整理し、何をすべきかについて自分の心の声に耳を傾けた。偉

大な宰相たらんと努力し、偉大な宰相となった。

私のなかで宰相たる人物は、右の二人によって最も明確な形をとっている。

*

ここで、日本の現在に戻りたい。この一〇年ほどの日本である。戦後半世紀以上が過ぎて、自民、民主両党から政治家の家に生まれた二世、三世あるいは四世の政治家が首相に就いた。本書に登場する総理大臣は一人を除いて、皆、そのような人々だ。彼らの特徴はおしなべて、歴史についての知識と理解が不足していることだ。

小泉首相の例を見てみよう。

二〇〇五年六月にモスクワで旧連合国による対独戦勝利六〇周年記念式典が開かれた。その式典によりによって小泉首相が出席したのだ。

式典は、彼らの定義では、全人類の敵であったファシズム国家群に対して、ソ連が勇敢に戦い、栄光ある勝利を遂げたことへの祝福を意味するものだ。その式典に参加し、頭を垂れることは、彼らの論理を認めることだ。

だが、第二次大戦中、日本はソ連に一発の弾をも撃ったわけではない。日ソ中立条約を一方的に破って攻めこんだのはソ連だ。

一九四五年九月二日、日本が降伏文書に調印した日、スターリンは一九〇四年の日露戦争

敗北の屈辱について、次のメッセージを発表した。

「この敗北はわが国に汚点を残した。わが国民は、日本が粉碎され、汚点が一掃される日が来ることを信じ、そして待っていた。四〇年間、我々古い世代はこの日を待っていた。そして、ここにその日は訪れた」

スターリンは、日本粉碎の決意で日ソ中立条約を踏みにじり、国際法たる条約を破って対日参戦し、北方領土を奪ったのだ。日本はそのスターリンに戦争終結の仲介を頼もうとしていた。日本の要請を検討するふりをしながら、八月九日突如、攻め入ったのがソ連だ。そのソ連の戦勝式典に参加するなどは、言語道断である。外交以前に己れを知らず、敵を知らない首相の行動は、祖国日本を、指導者自ら、奈落の底に突き落とすようなものである。

この事例に見られるように、歴史を知らない指導者は外交の軸を欠くために、自身も予期しない形で国益を損ねるのである。国家の基盤をどこに置くべきかわからないために、よかれと思つてすることも決して良い結果を生まないものである。それだけでなく、国家として取り組むべきこともわからないために解決すべき問題にも手をつけなくて終わるのである。

高い支持率と絶対多数を持つていながら、五年間の小泉政治の成果として目立つのは不良債権の処理と靖国参拝にとどまる。日本の直面する大事な問題に殆ど手をつけ得なかったのは、首相が国家観を欠き、歴史を学んでいなかったからだ。

小泉首相の後継者、安倍首相は圧倒的多数という恵まれた国会勢力を与えられた一方で、小泉首相が「ぶつつぶ」したために非常に脆弱ぜいじやくになった自民党の基盤に立って、多くの課題を処理しなければならぬという難局に、当初から立たされた。小泉首相に較くらべて安倍首相の歴史観ははるかに深いと感ずるが、不足していたのは前任者の運と胆力だと思う。『朝日新聞』をはじめ、いくつかのメディアは、安倍首相に対して最初から批判的だった。そうした眼前の圧力や非難を必要以上に気に病んだのではないか。中国に対しても外交を巧くこなしたいとの思いが先走ったのではないか。

靖国神社参拝では、小泉首相は参拝を貫いた。これが小泉政権最大の成果である。その一点において、実は私は小泉首相を高く評価する。だが、政局の判断に優れ、喧嘩に勝つための戦略戦術を身につけてはいても、国家観を欠けば、国家戦略は構築できないのである。

仮に、小泉、安倍両首相が靖国参拝の継続は国家の根幹にかかわる重要事であり、主権問題そのものだとの共通認識で戦略を構築したとすれば、一体何が起こっただろうか。

小泉首相は、靖国問題はもはや外交カードにはなり得ないと堂々と中国に言い渡した。日本国の首相として初めて大事なことを中国に明言した小泉外交の実績を、安倍首相に引き継ぐことが出来ていたなら、歴史カードを突きつけ続ける中国の対日戦略を挫き得ていただろう。両首相による靖国参拝の継続はまた日本人の誇りを回復するきっかけになっていたと思

えてならない。それが出来なかつたのが、両首相の限界だった。同時にそれは戦後日本の限界であり、岸以降、宰相と呼ぶに相応しい指導者を生み出し得ていない原因でもある。

自民党以降の民主党の首相については、論評に値しないために、特に記すことはない。

だが、政治は諦めないことが肝心である。失敗や挫折に学ぶことがどれほどその人物を鍛え上げるかは、チャーチルやニクソンを見れば明らかだ。

指導者たらしめとするわが国の政治家にとつて必要なのは、深く歴史を学び、広く世界を見ることだ。思索の時間を己れのためと、日本のために確保し、考えを深めることだ。心身の鍛練を続け、自分が生きている間の評判などに決して振り回されはしないという覚悟を身につけることだ。

まさに評価は歴史が下してくれる。たとえ、眼前のいま、評価されなくとも、宰相たる者の道を志したのであれば、それでよいのである。

二〇一一年一月

櫻井よしこ

本書は産経新聞「首相に申す」(二〇〇五年一月一三日から二〇一一年一月一三日)を再構成し、大幅に加筆したものです。初出は各項の末尾に示しています。

宰相の資格◎目次

菅直人総理

第一章 国家主権を揺るがす危機

- 自立外交の基盤には確かな国家観が必要である……………20
- フィンランド化を招く実態なき「日米同盟の深化」……………24
- 歴史を現在の価値観で断罪した菅談話……………28
- 南シナ海の現状は近未来の東シナ海の姿である……………32
- 「最小不幸社会」を目指すなら隣国の野蛮を批判せよ……………36
- 本質を見損なうな 領海侵犯は国家主権の問題だ……………41
- 私益で国益を打ち捨てることは許されない……………45
- インドと協調する対中戦略を持って……………49

鳩山由紀夫総理

第二章 国家の安全あつての「いのち」

第三章

小泉純一郎総理 経済より大事な日本精神

- 冷静な観察眼なき友愛では国を守れない……56
- 北方領土四島返還の基本方針を曲げてはならない……61
- 中国も捨てた「東アジア共同体」を持ち出す愚行……66
- 自らの言葉に不誠実で何が政治家か……72
- 「共生」と「参政権」を混同してはならない……77
- 「いのち」を守るためには国家の安全が大前提……82
- 民法改正はGHQによる日本改造計画の集大成……87
- 「いのち」が大事ならすさまじい人権侵害に抗議せよ……92
- 政治家が守るべき国家の根本は外交と安全保障である……97
- 国家の精神軸に切り込む改革を目指せ……104
- 普天間返還と移設は日本の安全保障政策である……108
- 日本文明の支柱である皇室を革命的に変える権利はない……112
- 日本の敵は「ハンディキャップ国家」と位置つけた日本自身……116
- 国家が情報戦に敗れてはどうしようもない……120

第四章

安倍晋三総理

日本呪縛のメカニズム

- 反日歴史観の罫にいつまで陥っているのか…… 124
- 謀略の総本山・中ソ共産党の手法を知れ…… 129
- 日米同盟を対等な双務条約に変える責務がある…… 133
- 首相の妥協を中国は屈服とみなす…… 137
- 北朝鮮を擁護する中国外交のゆがみを喧伝せよ…… 141
- 国家は敗戦ではなく指導者が対立を恐れたときに滅ぶ…… 145
- 「だまし討ち」村山談話を踏襲する必要はない…… 149
- 大局的な判断とは他国におもねることではない…… 154
- 虐殺・テロ国家を支える中国に民主主義国として物を言え…… 159
- 安全保障問題は摩擦を生む中国との対座が鍵…… 163
- 曖昧路線は中国に歴史カードを与え続ける…… 167
- 落とし所を探す外務省主導外交から脱却せよ…… 171
- 河野談話を放置すれば国民の精神の萎縮を招く…… 175
- 日本呪縛のメカニズムを打ち破らねばならない…… 179

第五章

福田康夫総理 全方位外交という有害

台湾問題で一寸後退すれば中国は一尺進む………183
二一世紀の価値観で中国の不条理を正せ………187
指導者が基本的価値観を見失えば国益を喪失する………191
国益より政局を優先すれば選挙は必ず敗北する………195
信念を実現する気迫こそが危機脱却につながる………199

国際政治では全方位外交は有害無益である………204
調整型政治で国家の問題解決能力は衰退する………208
首相は何のために政治をしているのか………213
闘う前に敗北した父、越夫首相の轍を踏むな………218
官僚群を日本国の主役においてはならない………222
激変する世界では主張なしには生き残れない………226
チベット問題には真っ先に抗議せよ………230
日本は道義によって立つ国だと国際社会に明言せよ………235
地球温暖化交渉は安全保障問題である………239

第六章

麻生太郎総理 政治家の大局観

- 北方領土不法占領を継続するロシアに首相のなれなれしい笑い…… 243
- 他国の国益を優先した外交史を恥じよ…… 247
- 乱世に「雇われ社長」気分なら政治家であるな…… 251
- 日本モデルを世界に発信するために党利を越えよ…… 258
- 日本包囲網のなかで金融危機をチャンスと捉えよ…… 262
- 「自由と繁栄の弧」大前提は日本の真の独立…… 266
- 吉田茂がやり残した課題は真つ当な軍隊を作ることだった…… 270
- 政治家としての価値こそが問われている…… 274
- 集団的自衛権を行使できない理由は官僚の考えにすぎない…… 278
- 日本文明の核としての皇室を存続させる仕組みを…… 282
- 主権と領土を経済の多寡ではかつてはならない…… 286
- 状況が厳しいほど「事の外に立つ」べきだ…… 291
- 場当たり策で自民党の土台は崩れた…… 296
- 靖国神社に参拝しないのは政治の矜持の喪失…… 301

装丁 朝倉まり
DTP制作 荒川典久